

その成果を発表されました。

みんなで協力をして郷土の地史を明らかにしていこうとする動きが次第に高まり、「なだうら団研」に引き続いて「平床団研」、「氷見団研」、「常願寺川団研」へと発展して、大きな成果をあげるようになりました。写真は、「なだうら団研」で活躍されたメンバーの方々です。

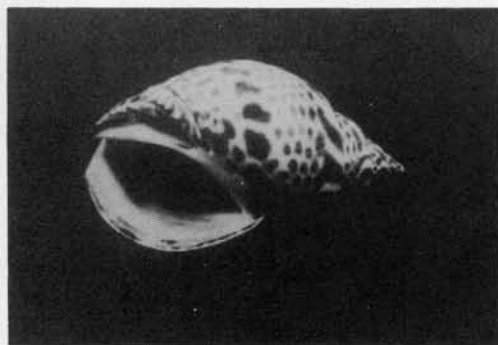


なだうら団研② 宿舎での調査結果の整理

普通切手に登場する二種の貝

四月一日から、四十円と六十円の普通切手が貝をデザインしたものに変わるということなので、この2種の貝について簡単にご紹介しましょう。

四十円切手に使われる「バイ」は学名を、「バビロニア・ヤポニカ」といい、北海道南部から九州までの水深10~20mにすむ、かっ色のハン点のある固いからをもった貝です。富山にもこの貝はいますが、富山で「バイ」といえばブッキヌム属のオオエッチュウバイ、カガバイ、エッチュウバイ、ツバイやネブチュニア属のチヂ



四十円切手に使われるバイ

昭和20年代の終り頃から徐々に大学で地学を専攻した先生方が増えてきました。今まで述べた先生方の他に昭和28年に松島洋先生、昭和31年に邑本順亮先生、昭和32年に三鍋久雄先生、昭和33年には西田輝雄先生、昭和34年には菊川茂先生などがこられ、団研活動も活発になり、少しずつ郷土の地史も明らかにされてきました。

これらの先生方は、昭和38年に高等地学が必須になりますとほとんど県立の高等学校に移られ、富山県地学もようやく明るい日差しを受けるようになってきました。また、最近では若い先生で地学を専攻した方々も増えているようです。

教育の現場もいろいろ揺れ動いているようですが、これらの先生方が頑張って富山県の地学と地学教育を盛り立てていただけるよう祈っております。

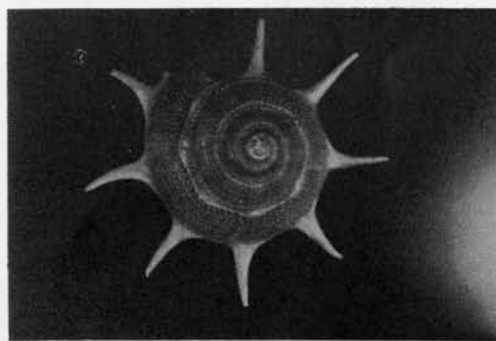
(おおの ただひろ：元高校教諭)

ミエソボラなどの深海の種をさすことが多いようです。もちろん、「富山湾のバイ」の方が刺身その他として味のよいことは当然です。

六十円切手に使われる「リンボウガイ」は学名を「ギルドフォルディア・トリウンファンス」といい、房総半島以南の50~300mの細かい砂の海底にする赤色の美しい貝です。

科学文化センターでは5月29日まで、第5回館蔵品展「高柳コレクション—貝一筋の生涯—」を開催中で、この二種の貝も展示しております。ほかにも美しい貝や珍しい貝、北の貝や南の貝など多数展示しておりますので、ぜひ、ご覧下さい。

(布村 昇)



六十円切手に使われるリンボウガイ